

# えほんのせかい こどものせかい

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

在校生のみなさんもお進級おめでとうございます

私はこの間、3月25日にオープンしたばかりの「こども本の森 神戸」に行ってきました。中之島、遠野に続き3館目の「こども本の森」。安藤忠雄さんが建築を手がけ、神戸市に寄附されました。こどもたちの素直な眼差しと感受性を大切にする「物語」の聖地をつくる、というのが「こども本の森」のコンセプトだそうです。所蔵されている本は絵本や児童文学がほとんどですが、画集や海外の本など、大人が読んでもおもしろいものもたくさんありました。現在はコロナ禍と混雑緩和のため、予約制となっています。場所は東遊園地の南側エリア。北側エリアも現在再整備中で、今年中に芝生広場やデッキテラスができるそう。みんなでおでかけできるようになるといいですね。

「こども」と「図書館」で思い出したのは松岡享子さん。神戸市出身の翻訳家・児童文学研究者です。「ゆかいなヘンリーくん」シリーズや「くまのパディントン」シリーズなど、多くの作品の翻訳をされたので、みなさんも読んだことがあるかもしれませんね。ご自身のお家で「松の実文庫」を創設、それぞれ文庫を運営されていた土屋滋子さん、石井桃子さんと一緒に東京子ども図書館を設立されました。『えほんのせかい こどものせかい』は「子供が読書の楽しさを発見する為に大人は何を手助けできるか」を解説してロングセラーになった本です。読みながら、自分が幼い頃、どうやって読む本を選んでいたか、読み始めてどんな気持ちになったか、どうして同じ絵本を何回も読みたくなってしまったのか、ということを考えていました。最初はお話の内容よりも絵のタッチが好きなものを選んでいたり、自分と一緒にぐらいか少し年上の女の子が主人公の話が好きだったことを思い出しました。読むことに慣れてくるとお話自体がおもしろいことにも気づくし、長い文章も読めるようになります。本屋さんに行った時には自分が興味を持てる本を見つけることもできるようになります。おもしろいものがあるぞ～と思えるのは、きっとそれまでにまわりの大人が手助けしてくれていたんだ、と今になってありがたく思うのでした。「こども本の森」で熱心に本を選んだり読んだり、なんとなくぶらぶら歩いてみたりしている子どもたちにも、みんなそれぞれお気に入りの本が見つかるといいな、大人になってもそれが記憶に残っているとのおうれしいな、と思いました。

## 松岡享子

1935年神戸市生まれ。神戸女学院大学英文学科、慶応義塾大学図書館学科卒。1961年渡米。ウェスタンミシガン大学大学院で児童図書館学専攻後、ボルチモア市公共図書館に勤務。帰国後、自宅で家庭文庫を開き、児童文学の翻訳・創作・研究を続ける。1974年、石井桃子氏らと共に東京子ども図書館を設立し、2015年より終身名誉理事長に就任。1999年、巖谷小波文芸賞、2011年に日本児童文芸家協会児童文化功労賞を受賞。2021年には文化功労者に選出。